

Well の感覚

廣瀬 浩三

0. はじめに

廣瀬 (2014) では、談話標識についての基本的な考え方を整理した。本稿では、その実践編として、談話標識のすべての諸特徴を兼ね備えていると言える *well* の分析に挑みたい。

well は、これまでの談話標識研究の中で最も多く議論されてきた談話標識の一つである。その理由としては、*well* の多機能性により、どのようなアプローチでも捉えることができ、談話標識の機能そのものを追求する論考では、格好の言語資料を提供してくれるからである。ところが、いざ *well* に絞った研究では、一冊の書物でも語りつくせない面があり、依然として、*well* の本質についてコンセンサスは得られていない。¹

本稿では、こうした談話標識の中で最も馴染みがあるが捉えにくい “elusive *well*” [Blakemore(2001:137)] の包括的な記述に挑みたい。具体的には、まずこれまでの先行研究を振り返り、それぞれの先行研究の優れた点と問題点を指摘し、本稿の立場を明らかにしたい。そして、談話の流れを念頭に置きながら、それぞれの文脈の中で果たす役割を可能な限り網羅的に例証したい。そして、最後に、*well* の本質を明確にし、その意味機能をまとめたい。

1. *well* の一般化を巡って

well は、談話標識の中で最も捉えにくいものの一つである。というのも、*well* の形容詞としての「(身体的に) 良い状態にある」の意や副詞としての「上手に；十分に；大いに」という語彙的な意味は薄れ、極めて幅広い文脈で様々な機能を果たすからである。そしてその意味機能を追及していく際に、語用論的な観点から記述しようとする、その特徴が *well* 自体のものか、その用いられている文脈に起因するのか、区別が難しいという点が挙げられる。[cf. Cuera, M., 2008:1373]

以下、この厄介な *well* についてこれまでどのようにその一般化が図られてきたかを振り返りたい。

1.1 Lakoff (1973)

早い時期に、*well* の意味機能を端的に述べたものとして Lakoff (1973) があげられる。Lakoff (1973) では、主として疑問文の応答に現れた *well* について議論されているが、以下のような一般化を図っている。

Well is used by a speaker in an answer to a question if he ‘senses some sort of insufficiency in his answer whether because he is leaving it to the questioner to fill in information on his own or because he is about to give additional information himself.’ (Lakoff, 1973:463) (*well* は、

話し手が自分で情報を補うことを聞き手に委ねようとしている、あるいは自分自身で追加的な情報をまさに述べようとしているかのどちらかの理由で、話し手が自分の答えに何らかの不十分さを感じる場合に、質問に対する答えで話し手によって用いられる。

well を用いる話し手は、相手に情報を補うことを委ねるか、あるいは自ら追加的な情報を補おうとしており、いずれにしても何らかの不十分さ (*insufficiency*) を感じていることを示すとしている。以下、Lakoff (1973) があげた判事が被告人に対して質問している例を見てみよう。

(1) A: Did you kill your wife?

B: *Well*, yes.

(A: あなたは妻を殺したのですか? B: まあ、その通りです。)

ここで、自分の妻を殺したことは認めているが、*well* を付すことによって、単に *yes* とするには、「不十分である」ことを示唆し、例えば、酌量の余地を求めていることを示している。従って、判事は、その具体的内容を確認しようとして、“What do you mean by “well, yes”?” と尋ねる可能性が高いと述べている。

上記の一般化は、Lakoff の鋭い直観によるものであるが、Blakemore (2002:133) では、Lakoff の「不十分さ」は、文脈を質問とその答えということに絞っても、質問をしている側、あるいは答える側の「情報の不十分さ」について言っており、以下の例ではあてはまらなると指摘している。

(2) A: Would you like to stay to dinner?

B: *Well*, that would be lovely. Are you sure? —以上、Blakemore (2002:133)

(A: 夕食を食べていかれますか? B: まあ、それは素晴らしいですね。本当ですか?)

B の応答は、A の招待に対する答えとして何らかの不十分さがあるとしても、情報の不十分さではなく、夕食の「申し出」という発話行為に対する「不十分さ」ということになる。ここでの *well* の使用は、相手の「申し出」が予想外であり、後続文で示唆されるように、本当であるのか自信がなく、その申し出を受けてよいのかためらいのニュアンスも感じられる。

さらに、以下のやり取りにおいても、計算方法が問われて、その解き方を説明している例であるが、答えでは、最初の計算から答えにたどり着くまでの順序を説明しており、情報的な「不十分さ」は感じられない。むしろ、自らの説明の切り出しとして、話を進めていく上でのきっかけとなっている。

(3) A: What's 221 divided by 13?

B: Um, let me think...OK, that's 17.

A: How did you work it out?

B: *Well*, first I divided thirteen into 22. Then I subtracted the remainder and that left 9. Then I...

—以上, Schourup 2001:1053

(A: 221 を 13 で割ると答えは何ですか? B: うーん, ええーっと, 分かった 17 です。

A: どうやって解いたのですか? B: そのう, まず 22 を 13 で割って, それから残りを引いて, 9 残ります。それから ...)

以上, Lakoff の一般化については, その分析範囲が質問とその応答に限られているという限界があると共に, 応答のやり取りだけに絞っても, 文字通りの情報交換にとどまらず, 語用論的なやり取りがあり, 情報の過不足という観点のみでは正確な一般化を図ることは難しいと言える。

1.2 Schiffrin (1987)

Schiffrin の一般化の背後には, 談話標識は首尾一貫性 (coherence) に関わるという基本的な考え方がある。² そして, *well* の機能については, 以下のように一般化している。

Well anchors the speaker precisely at those points where upcoming coherence is not guaranteed. (Schiffrin, 1987:126) (*well* は, これから先の首尾一貫性が保証されていないときに話し手を支える。)

Well is appropriate precisely at those points where 'the coherence options offered by one component of talk differ from those of another.' (Schiffrin, 1987:127) (*well* は, 談話の一部から得られる首尾一貫性の選択が他の談話から得られる首尾一貫性とは異なる際に適切である。)

首尾一貫性基盤とする理論では, 必ず先行文脈 (あるいは後続文脈) を必要とし, *well* は, 後続する文脈が, 首尾一貫性を保証していないことを合図する, あるいは, その首尾一貫性に何らかの齟齬が生じたことを合図する標識であると一般化することになる。しかしながら, Schiffrin の説明の限界は, その基盤としている首尾一貫性に基づく限界と言っても過言ではない。

(4) のように談話の切り出しや, (5) のように何らかの状況に対する反応として用いられる *well* の場合は, 前提となる先行する文脈がないため, 首尾一貫性の概念そのものを拡張し, 具現されない先行文脈といったものを想定しなければ, *well* の用法を説明することができない。

- (4) [授業の最初に教師が学生に向かって] *Well*, what do you like to do today?
(Blakemore, 2002:143) (ねえ、今日は何がしたい?)
- (5) [朝目覚めて外の景色を眺め] *Well*, isn't it beautiful outside.
(Schourup 2001:1027) (わあ、外はなんて美しいんだ。)

また、先行文脈がある場合にも、以下の例においては、熱心に相手の意見に同調しており、首尾一貫性は保たれており、首尾一貫性に何らかの違和感があるとしても、先行文脈との不整合から生じるものではない。

- (6) See how the kid's standing up to that bully? —*Well* damned if he isn't!
(Schourup, 2001:1027) (その子供は例のいじめにどうやって立ち向かって行くんだい? —なんだってそんなことへっちゃらさ。)
- (7) Marie looks very lovely.—*Well* so she does! (Schourup, *ibid.*)(マリーはとても素敵だね。—ああ本当にそうだね。)

ただし、*well* の文字通りの意味に反して、談話上、何か良くないことが生じた場合に *well* と発して合図するという Schiffrin 一般化はかなりの説明力がある。

1.3 Bolinger (1989)

Bolinger は、“the natural condition of language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form” (Bolinger, 1977:x) の原則に沿って、*well* の原義との関連性を捉え、以下のような一般化を行っている。

Well indicates “deliberate comparison” with a norm. (Bolinger, 1989:317) (*well* は規範との熟慮した比較を示している。)

さらに、*well* の意味は、命題の一部として機能する領域から発話の力の領域へ転化されていると説明している。Bolinger の一般化は極めてシンプルなものであるが、その奥深さは、話し手の心の中に踏み込んだ一般化になっている、すなわち、認識論的な領域まで踏み込んでいる所にある。しかし、同時に Bolinger の一般化の理解が難しいのは、何が“norm” (規範) であるのかということがはっきりしないという点と、“deliberate comparison” という部分によって、*well* を用いる話し手が、談話を円滑に進めていくためにいろいろと思いを巡らせている具体的な心的状態を読み取らなくてはいけないということである。

Bolinger の概念をうまく適用することで、幅広い文脈における *well* の使用を説明できる。例えば、驚きを表すような文脈では、ノーマルな状況に照らし合わせると驚くべきことだということを表しており、先行文脈がなくとも、*Well?* というのは、相手の言動が、適切な行動、すなわち、「規範」(norm) に照らし合わせて良くない行動であるといった批判を表

していると説明できる。その他、以下の例のように、(8)の談話の切り出しとして用いられる場合や、(9)のように語りの中で用いられる *well*、さらに、(10)、(11)の不賛同や相手との同調を表す場合などについても、上記の「規範」という概念に沿って、談話調整を行おうとしていると説明できるのである。

(8) *Well*, what are we going to do today? (さて、今日は何をしましょうか?)

(9) I knew something wasn't quite kosher so I decided to wait a little longer. *Well*, about five o'clock I heard someone knock, and... (何か変だなと気づき、もう少し待とうと思ったんだ。ええと、5時頃だったかな、誰かがノックする音が聞こえて、...)

(10) I wanted to apologize.—*Well*, it's too late now. (謝りたかったんです。—いや、今じゃ少し遅すぎますよ。)

(11) *Well*, that isn't true. (いや、それは真実ではない。)

Schourup (2001) は、Bolinger の見解を高く評価しているが、若干の注意点を指摘している。例えば、「驚き」を合図するとされる “*Well*, I never!”, “*Well* did you ever?”, “*Well* look who's here?” などでは、*well* がなくても、「驚き」が伝わる。また、“*Will* you help me?” “*Well*, of course.” のようなやり取りでも、*well* がなくとも、*of course* が付されているので、わざわざ頼む必要はないといったことが示唆できると述べている。このように、「驚き」や「不賛同」は、必ずしも *well* 固有の意味として生じるものではないとしている。さらに、“*Well*, *well*!” や “*Well*, *well*, *well*!” といった表現は、いわくありげな (conspiratorial) 響きを伴うとしているが、慰めを表す “*There*, *there*! (*There*, *now*!)” や言動をたしなめる “*Now*, *now*!” と同様に、用いられる文脈がある程度限定されたイディオム化された表現として扱うべきであると主張している。また、“*Oh well*!” についても、「あきらめ」の意は成句的な意味として定着しているとしている。“*Well*?” が相手の発話を促す用法として用いられるのも、上昇調のイントネーションや継続性 (continuation) を示唆する *well* の別の性質から導かれるとしている。(Schourup, 2001:1030)

このように、Schourup (2001) は、Bolinger の一般化に対して、文脈そのものから生じる意味と *well* 自体が示す意味との区別が難しい点や、定型的な表現形式で限定された文脈で用いられる表現があることを指摘している。

1.4 Jucker (1993)

Jucker (1993) は、関連性理論の立場から、以下のように *well* の用法を一般化している。

The discourse marker *well* indicates that the addressee has to reconstruct the background against which he can process the upcoming utterance. What seems to be the most relevant context is not appropriate. (Jucker, 1993:438) (談話標識 *well* は聞き手が後続発話を処理する背景を再構築しなければならないということを示している。最も関連性があると思わ

れる文脈が適切ではない。)

It (= *Well*) signals that the content created by an utterance may not be the most relevant one for the interpretation of the next utterance.” (Jucker, 1993:450) (*well* は、ある発話によって産み出された内容が次の発話を解釈するために最も関連性があるものではないかもしれないということを合図している。)

Jucker の一般化は、関連性理論の立場からの一般化として打ち出されているが、首尾一貫性の Schiffrin と同様に、必ず先行文脈、あるいは後続文脈があることを前提とした上で、聞き手が発話の背景の再構築をしなければならないといった一般化になっている。

しかし、先行文脈を必要としないような状況、例えば、講演者が壇上に現れることを待っている聴衆に対する言葉として発せられるような (12) のような状況では、その切り出しとなる *well* の用法は説明できない。また、先行文脈がある場合でも、(13) では、先行文脈における Tom を正しく認識して、後続文脈を続けており、*well* によって、その後続する内容が最も関連性のあるものではなく、内容の再構築をしなければならないことを合図しているとは解釈しがたい。(Blakemore, 2002:135)

(12) *Well*, as you all know, our speaker today is... (ええ、皆さんご存じのように、今日の話し手は ...)

(13) Do you remember Tom? *Well*, he's just bought a motorbike. (トムのこと覚えている？ あのさ、オートバイを買ったんだってさ。)

さらに、Schourup (2001:1028-1029) が指摘しているように、(14) の例では、Jucker の言うように、*well* 以下の発話がされている文脈が不十分なものであることを合図しているとは解釈しにくく、後続文脈を伴わない (15) についても、説明がつかない。

(14) *Well* how nice to see you, Simon! (Schourup, 2001:1028)
(わあ、君に会えてうれしいよ、サイモン！)

(15) A: There's something I need to ask you.
B: *Well*? (Schourup, 2001:1029)
(A: あなたに尋ねたいことがあります。B: 何だい?)

1.5 Schourup (2001)

Schourup (2001) は、最も包括的に *well* を分析した研究として評価でき、Bolinger の認識論的な考察を発展させ、以下のような一般化を図っている。

I have argued that it may be more appropriate to view *well* as quasi-linguistic vocal gesture

used to ‘portray’ the speaker’s mental state than as a ‘full-fledged word’ linguistically encoding information about that state. (Schourup, 2001:1058)

(*well* は、話し手の精神状態についての情報を言語学的に記号化している「本格的な語」というより、話し手の精神状態を「描く」のに用いられる疑似言語学的有声ジェスチャーとみなすことがより適切であるかもしれないということをこれまで主張してきた。)

Schourup の一般化は、Bolinger と同様に話し手の心の中を記述しており、独自の点は、*well* の間投詞的な側面を重視し、話し手の心の状態を語彙化して表しているのではなく、心の状態が思わず口に出てしまうといった“a quasi-vocal linguistic gesture”であると結論づけている。そして、別途、*well* の意味の特徴として、熟慮 (consideration) から継続 (continuation) を示唆すると指摘している。さらに、Schourup (2001) も関連性理論的な考え方を支持し、*well* の表す意味は概念的意味 (conceptual meaning) ではなく、手続的意味 (procedural meaning) を表し、話し手が認知的な熟慮をしているという解釈を促す合図であると主張している。

I have further argued that as an interjection of mental state of *well* functions procedurally when occurring in utterance-prefatory position. The procedural role of *well* in its position is to encourage the construction of an explicature to the effect that the speaker is saying the *well*-marked utterance with epistemic consideration. (Schourup, 2001:1058) (精神状態を表す間投詞としての *well* は、発話の前置きの位置に生じる際には手続的に機能しているとさらに議論した。その位置における *well* の手続的な役割は、話し手が認知的な熟慮をして *well* 付の発話を行っているという意味で、明示的発話の構築を助けている。)

1.6 Blakemore (2002)

Blakemore (2002) では、Jucker (1993) と同様に、関連性理論に立脚しているが、異なる結論を導いている。

Blakemore の考え方では、談話接続語 (discourse connectives) は、一般に、手続的な意味 (prosedual meaning) を担い、初期の研究では、その手続的な意味として、文脈的效果を生み出すもの (*so, therefore*)、文脈的效果を強化するもの (*after all, besides, indeed*)、文脈的效果を否定するもの (*but, however, nevertheless*) の三つの種類を認めた。さらに、*but* と *however, nevertheless* の相違について詳しく吟味することによって、文脈について制約を加える手続的な意味を担うものがあることを指摘し、*but* と *nevertheless* を区別した。*well* については、文脈的效果とは直接関係しない別の手続的な意味を担うものとして、以下のような一般化を図っている。

Well could be regarded as a signal simply in the sense that it provides a green light for the hearer, a sign to go ahead with the inferential processes involved in the derivation of

cognitive effects. (Blakemore, 2002:147) (*well* は、単に聞き手に進めの合図をする標識、すなわち、認知的効果の派生に関わる推論過程を進める合図とみなすことができよう。)

The speaker believes *U* is relevant (where *U* is the utterance containing *well*).

(Blakemore, 2002:148) (話し手は、(U が *well* を含む発話である場合に) U には関連性があると信じている。)

Blakemore (2002) は、*well* を吟味することにより、談話標識の手順的な意味が多種多様であることを再確認し、関連性理論で言う「最適な関連性」(optimal relevance) を念頭に置き、*well* は、最小限の労力で発話解釈できるように、文脈から生じる様々な推論の可能性についての選択を制限し、最適の関連性の達成に寄与することを合図する標識であるという最も一般的な結論に至ったのである。この結論の意味するところは、談話標識を含む言語表現も、他の言語表現と同様に、関連性理論の中で十分説明されるべきものとして位置づけられたということである。

1.7 *well* の一般化のまとめ

以上、いくつかの一般化を見てきたが、Schiffrin, Blakemore, Jucker は、それぞれの自らの理論言語学の立脚し *well* の一般化を図っており、Schiffrin は、その首尾一貫性理論そのものの限界で *well* のすべてをカバーできず、Blakemore と Jucker を比較すると、同じ関連性理論基盤の説明であるにしても、Blakemore の方が説明力のある一般化を行っていると言える。Schourup も理論的な基盤としては、関連性理論の立場に立った議論を展開しているが、こと *well* に限っては、独自の概念を導入し、その一般化を図っている。

Lakoff は、質問と応答の文脈に限られているが、ネイティブスピーカーとして鋭い直観を示し、Bolinger についても、上記で述べたように“one form for one meaning”という独自の原理を踏まえ、ある特定の言語理論に頼ることなく、いつもながらの洞察力あふれた見解を示している。少し難解な点でもあるが、Bolinger の一般化は、認識的な概念として提示されており、そこにその奥深さがある。

筆者の立場としては、Bolinger に近く、ある特定の言語理論に立脚した議論展開ではなく、独自の一般化を試みたいが、抽象化した認識的な一般化というより、広く談話の流れの中で *well* を記述的に捉えて、その集約として *well* の一般化を図りたい。

2. 談話の流れと *well* の感覚

2.1 発話の切り出しに用いられる *well*

well を用いる際には、必ず新たな認知環境 (cognitive environment) の変化がある。そうした新たな認知環境に対する即自的な感情反応を示すのが、*well* の間投詞的用法である。

新たに生じた相手の行為や眼前に現れた状況に対して反応し *well* を発すると、先行文脈のない *well* の用法となる。そうした新しい認知環境に対して、話し手が何らかの感情的反

応を表し、これから組み立てていこうとする談話の切り出しとして *well* が発せられるのである。そうした例として、(16a) では、驚き (surprise) が示唆され、(16b) では、試験結果を相手に求めている。

(16) a. [someone has just left the room after losing their temper] (かんしゃくを起こした後誰かがその部屋を離れる)

Well. [intonation fall] (Blakemore, 2002:132)

b. [hearer returns after finding out examination results] (試験結果を知った後で聞き手が戻ってくる)

Well? [intonation rise] (Blakemore, *op. cit.*)

この感情的な反応は、必ずしも否定的なものではなく、朝、目覚めて外の素晴らしい景色を目の当たりにし、以下のような賞賛 (admiration) を表す感嘆的な発話をするような場合にも *well* が用いられる場合がある。

(17) *Well*, isn't it beautiful outside. (Schourup 2001:1027) (わあ、外はなんて美しいんだ。)

同様に、次の例でも、*well* で相手に発話を促す形式となっているが、その前提として状況への反応がある。(18a) では、ロシアの戦車を目にし、狼狽している精神状態が表され、(18b) では、二人きりの海岸で、相手からの優しい言葉を期待して語りかける場面であるが、「マリファナを持っているか」とまったくムードのない言葉が返ってくる場面である。

(18) a. The Russian tanks were no longer hiding behind trees. Two of them were squatting right in the center of the road. “*Well?*” George asked Geza. “Don’t panic, Gyuri. It’s snowing like hell and they don’t seem to be paying very close attention.”—E. Segal, *The Class* (ロシアの戦車はもはや木の背後に身を隠してはいなかった。そのうちの2台が道路のど真ん中にうずくまっていた。「どうすりゃいいんだ？」ジョージはゲザに尋ねた。「うろたえるんじゃない、ギュウリ。雪が激しく降っていてそれほど注意は払っていないようだ。)])

b. They waded into the ocean up to their knees, and watched a flotilla of sailboats beat against the wind. There was no one nearby in the sea, no watchers on the shore. “*Well?*” she asked. “Listen, Jane?” he said hoarsely, “have you got any joints?”—L. Sanders, *The Case of Lucy Bending* (二人は膝が浸かるまで海の中に入っていき、ヨットの小艦隊が激しく風に当たる様子を眺めていた。海の中には近くに誰もおらず、海岸にも誰もいなかった。「ねえ？」と彼女は尋ねた。「おい、ジェーン。」と彼はしわがれ声で言った。「マリファナはあるかい？)])

また、特に先行文脈を必要としない *well* の用法の一つとして、*well* を繰り返して、いわくありげな響きを伴う表現がある。この表現は、(19a) のように、「おやおや」と面白がってほくそ笑むようなときや、呆れた様子を示す表現となる。(19b) では、その「いわくありげな」(conspiratorial) 言動の意味をさらに問われていることに注意されたい。このような *well* は、3度繰り返られることもあり、(20a) では、密かに家宅捜査をしていて、愛人の存在を知り、独り言で発した言葉として使われている。(20b) は、殺人現場での第一声である。

(19) a. “Well, well,” Geddes amused, breaking into a grin. “If we needed any more proof that Abigail Griffen is guilty, we just got it.”—P. Margolin, *After Dark* (「おやおや」とゲデスは面白がって笑みを浮かべた。「アビゲイル・グリッフェンが有罪である証拠がもっといるというのなら、手に入ったぞ。」)

b. “I know her,” the man said. “What do want with her?” “She’s my daughter.” “Well, well,” the man said. “What’s *that* mean, ‘Well, well?’”—Ed McBain, *Heat* (「彼女のことは知っていますよ。」とその男は言った。「彼女に何がお望みなんだい?」「私の娘なんです。」「おやおや」とその男は言った。「『おやおや』とはどういう意味ですか?」)

(20) a. I tried the bed-table drawer. The diaphragm was gone, as were the bottle of cologne and the tissue paper pack with the enameled heart and gold chain. *Well, well, well.* His latest inamorata must have heard about the shooting.—S. Grafton, “*O*” *IS For Outlaw* (ベッド・テーブルの引き出しを開けてみた。するとペッサリー〔女性避妊具〕がなくなっていて、コロンのビンとエナメルハートの金鎖がついたティッシュペーパーの箱があった。おや、おや、おや。彼の最も新しい愛人はきっと銃声を聞いたに違いないわね。)

b. They were still at the scene when Carella and Kling got there at nine-thirty that morning of the eleventh. So were Monaghan and Monroe from the Homicide Division. “Well, well, well,” Monaghan said, “look what the cat dragged in.” “Well, well, well,” he repeated.—Ed McBain, *Romance* (「キャレーラとクリングが11日の朝9時半に現場に到着したとき彼らはまだ現場にいた。殺人課のモノハンとモンローもいた。「おや、おや、おや。」とモノハンは言った。「ひどく汚いじゃないか。」「おや、おや、おや。」と彼は繰り返した。)

well は、話し手が主体的に新しい認知環境を作り出す際にも用いられ、これが談話の切り出しとして、疑問文と共に用いる用法となる。疑問文は、基本的には、話し手の知らない情報を聞き手に求める表現形式であるので、新しい認知環境を生み出そうとする *well* と整合性のある表現形式となっているのである。(21) のように、教師が授業の初めに学生に切り出す質問は、*well* が先行文脈を必要としない典型的な例の一つである。

(21) *Well, what do you like to do today?* (Blakemore, 2002:143) (ねえ、今日は何がしたい?)

(22a) の例では、こうした発話の切り出しの *well* の持ち味が上手く描写されている。また、(22b) では、*well* によって相手に情報を求めて発話を切り出さそうとしたが、すぐさま相手から何を聞きたいのか具体的内容を述べるように促されている。

(22) a. “*Well,*” said Donna. “*Well,*” Annabelle replied. *Well* was always Donna’s opening remark, delivered in a way to make clear that she knew Annabelle was in a midst of some inadmissible train of thought.—M. Cohen, *Flowers of Darkness* [Greenbaum & Quirk 1990:185] (「あのね」とドナは言った。「なあに」とアナベルは答えた。*Well* はいつもドナが用いる切り出しの言葉で、アナベルが許しがたい一連の考えに耽っていることは分かっていることをはっきりさせるように発せられた。)

b. Billy looked at her and stretched his legs restlessly. “*Well?*” he asked. “*Well what?*”—H. Clement, *Columbo#3: Any Old Port In A Storm* (ビリーは彼女に目をやり、落ち着かない様子で足を伸ばした。「それで?」彼は尋ねた。「それでって、どういうこと?」)

以下、話し手と聞き手の相互作用の中で、*well* がどのような機能を果たしているか、吟味していきたい。

2.2 文脈の中の *well* (1): 二つの発話を繋ぐ *well*

2.2.1 即自的な反応を表す *well*

相手の言動が新しい認知環境を生み出す場合には、*well* はそれに反応して様々な文脈を生み出していく。相手の情報の受容と自らの情報産出の間に挟み込まれるのが *well* である。(23) は、突然かかってきた電話における会話であるが、*well* の代表的な用法である「驚き」(surprise) を表している。(23b) では、*but* を伴い、その後に感嘆疑問文がきていることにも注意されたい。

(23) a. “Joana? Ken.” “*Well,* this is a surprise. I thought you weren’t speaking to us.”—L. Hays, *Columbo#5: Murder by the Book* (「ジョアナかい? ケンだ。」「まあ、これは驚きね。私達には話をしたくないんじゃないかと思ってたわ。)」

b. “Laurie’s mine. That’s Jill, her friend.” “*Well,* but don’t they look alike though! It’s amazing!”—N. Klein, *Sunshine Years* (「ローリーは僕の娘だ。そっちはジル、彼女の友達だ。「まあ、でも本当に二人は似ているわね。驚きだわ。)」

談話の流れの次の段階として、相手とのやり取りの中で生じた新しい認知環境に対して適応していこうという意識が働く。*well* は広くコミュニケーション活動の調整を図る標識

であると特徴づけることができる。

また、感情的に *well* の最も中立的な用法は、相手の言葉を受容したことを単に合図する用法である。(24a) では、自分の犬に相手の犬の名前を付けようとしている場面であるが、相手からの言葉を受け、それに同調した提案を行っている。また、(24b) では、はっきり分からないもののいったん肯定的に受け入れ、相手の言葉を受け流そうとしている。

- (24) a. “What was your dog’s name?” Susan said. “Pearl.” “Well, let’s call her Pearl.”—R. Parker, *Mortal Stakes* (「あなたの犬の名前は何ていうの？」とスーザンは言った。「パールだ。」「それじゃ、その犬の名前をパールにしましょうよ。」)
- b. “Do you know what rigor mortis is?” “Well, yes,” Kling said uncertainly. “It’s a muscle stiffness that occurs after death,” Wright said. “Well, sure.”—Ed McBain, *Heat* (「死後硬直がどのようなものか知っていますか?」「まあね」とクリングは不確かに行った。「死後に生じる筋肉の緊張のことだよ。」とライトは言った。「なるほど、その通り。」)

2.2.2 質疑応答で用いられる *well*

質問と応答のやり取りの中では、特に応答で用いる場合には、自らの知識不足と共に、その質問やその背後にある想定に対して「不十分さ」が感じ取れる場合に、談話調整を図ろうとしていると言える。(Lakoff, 1973:463) 以下の例では、相手の陳述の前提がそもそもふさわしくないことを指摘する文の切り出しで使われていることに注意したい。

(25) A: Anan’s much taller than Verity.

B: Well, she is two years older.

(Blakemore, 2002:130)

(A: アナはベリティーよりずっと背が高い。B: だって、彼女は二つ年上だよ。)

また、*well* は、せいぜいここまででは言えると話し手の協力的な態度も示される。話し手としては、最大限の努力をしていることを示すことが、会話の礼儀なのである。*well* の後に条件付きの陳述がしばしば後続する。

- (26) “You thinking big problem, or little problem? I’ve got to know,” Sanders said. “It’s going to come up in meetings tomorrow.” “Well, at the moment, the answer is we don’t know. It could be anything. We’re working on it.”—M. Crichton, *Disclosure* (「君が考えているのは大きな問題なのかい、それとも小さな問題かい? 知りたいもんだな。もっとも明日の会議ではっきりすることだがね。」とサンダースが言った。「まあ、今のところ、答えは分からないということかしら。どうにでもなるわ。何とかしようとしているところよ。」)

こうした言動の裏には、(27)のように自信のなさや(28)のように自己防衛的 (self-defensive) な意識も働いているように思われる。

(27) a. A: Would you like to stay to dinner?

B: *Well*, that would be lovely. Are you sure? (Blakemore 2002:133)

(A: 夕食を食べていかれますか? B: まあ, それは素晴らしいですね。本当ですか?)

b. “Have you had it checked?” “*Well*, I’m not sure how to go about it and I feel like a fool asking the phone company to come out.”—S. Grafton, “*E*” *Is For Evidence* (「それをチェックしてもらったのかい?」「いえ, どう扱っていいか分からないし, 電話会社にはっきりさせることを頼むなんて馬鹿みたい。)」)

(28) A: Why did you accept the money?

B: *Well*, I couldn’t see any reason why I shouldn’t. (Blakemore 2002:131)

(A: あなたは何故そのお金を受け取ったのですか? B: そのう, 断る理由が見つからなかったものですから。)

2.2.3 発話態度を暗示する *well*

コミュニケーションは、相手の言動に対して「賛同」を示していく場合には円滑に進んでいくが、「不賛同」やその他、対立的な意見を発する場合には、会話が滞ることになる。その会話の滞りをマークし、熟慮しながら、会話の立て直しを図ろうとするのが *well* の重要な機能の一つである。以下、いくつか否定的なやり取りを観察していこう。

まず、(29a, b) の例のように、相手の発話に対し、きっぱり否定 (direct disagreement) を表す際に、*well* から発話を始めることも多い。(29b) のように憤慨した感情 (indignation) を伴うことも多い。

(29) a. “My friend, Laurie, is divorced, like you,” Jill said. “Her mommy is her.” “*Well*, I’m not divorced now,” David said. “I’m married...my wife’s name is Lauren.”—N. Klein, *The Sunshine Years* (「友達のローリーは離婚しているわ, あなたのようね。」とジルは言った。「彼女のお母さんはローリーよ。」「でも, 僕は今離婚していない。」とデイビッドは言った。「僕は結婚している。僕の妻の名前は, ローレンだ。)」)

b. “I don’t mind.” “*Well*, I do mind, dammit. I mean, I want our first time to be somewhere a little more romantic.”—E. Segal, *The Class* (「僕は気にしないさ。」「でも, 私の方は気になるわ, 何言ってるのよ。つまり, 私たちの初めての経験はもう少しロマンチックな場所にしてもらいたいということよ。)」)

また、次のように相手の意見に対して反論するような場合の切り出し (counter-argument) としてしばしば用いられる。(30a) のように、相手の言葉に、修辞疑問文などを用いて切り

返す場合も多い。いわば、言葉のカウンターパンチをくравす用法である。(30b)のように、相手の言葉を *well* で受けて、修辞疑問文などによって切り返す例も多くみられる。

- (30) a. “A lot of guys resented what you did.” “Well, I resented Mickey’s asking me to lie for him.”—S. Grafton, “O” *Is For Outlaw* (「君のしたことで怒っている奴が多いよ。」「何言ってんのよ、こっちの方がミッキーが自分のために嘘をついてほしいと頼んできたことに腹が立ったわ。」)
- b. “You blackmailed him.” “If you want to call it that.” “Well, what else would you call it?” Grant asked angrily.—W. Harrington, *Columbo: The Game Show Killer* (「君は彼を脅迫したんだね。」「そういうふうに言いたければそうなるね。」「でも、他の言い方があるのかい?」とグラントは怒って言った。)

他方、*well* は、相手に配慮した態度を打ち出すことができ、相手の意向を満たせない時に、丁寧な否定を表す表現になる。(31b)では、後続する *actually* も予想外の応答を示唆し、緩衝的な表現として働いている。

- (31) a. Jack flushed. “We want meat.” “Well, we haven’t got any meat...” —Golding, *Lord of the Flies* (Carlson 1984:45) (ジャックは顔を赤らめた。「我々には肉が必要だ。」「でも、肉は全然ないんだ。」)
- b. “Mind if I join you?” “Well, actually, I’d prefer to have the time to myself,” she said, avoiding my gaze.—S. Grafton, “E” *IS For Evidence* (「ご一緒によろしいですか?」「いえ、実は、一人の時間がほしいので。」彼女は私の視線を避けながら言った。)

そして、何も言いたくないといった応答を拒む否定的な態度 (*reluctance [to say nothing]*) を表す場合もある。

- (32) a. A: Have you done the essay?
B: *Well*. (Blakemore, 2002:132)
(A: エッセイは書き終えたの? B: うーん。)
- b. “I feel as though you’re the one friend I can count on in all this.” “Thanks. I’ll try.” “So, how bad is it?” “Well. It’s hard to say.” “Just tell me.” —M. Crichton, *Disclosure* (「君はこのすべてに関して私が信頼できる唯一の友人だ。」「有難う。そうなるように努力するよ。」「で、どれほどひどい話なんだい?」「うーん。言いづらいわね。」「言ってくれよ。」)

しかし、否定的な態度ばかりでなく、許可を表すこともある。但し、まだ積極的に相手の意向に賛同しているわけではない。

(33) A: Mum, can I go down to the park with my roller-blades?

B: *Well*, I don't see why not.

(Blakemore 2002:131)

(A: お母さん、ローラー・ブレイダーで公園まで滑って行っていい？ B: ええ、いいんじゃないの。)

全面的な否定ではなく、部分的な否定 (partial disagreement) を表す際のマーカーとして機能することも多い。あるいは、条件付きで相手の依頼等の意向を受け入れる際にも、まず *well* で「あきらめ」(resignation) や「妥協」(compromise) を示すのである。

(34) a. “Does all this sound completely nuts to you?” “*Well...no*,” she said cautiously. “Not completely.”—L. Sanders, *The Case of Lucy Bending* (「すべて君にとっては馬鹿げたことだろうね?」「いえ、そんなことないわ。」と彼女は注意深く答えた。「それほどね。」)

b. “I could move you first thing tomorrow morning.” “Bert,” I said. “Someone broke into my room! There’s no way I’m going to stay here.” “*Well*. Even so. I’m not sure what we can do at this hour.”—S. Grafton, “*F*” *Is For Fugitive* (「明日の朝まず君を移動させるよ。」「パート、誰か私の家に押し入ったのよ。絶対ここには居られないわ。」と私は言った。「そうだね。たとえそうでも。この時間じゃどうしていいか分からないよ。」)

(35) “Will you come in with me?” “*Well...maybe* just for a few minutes. You got anything to drink?”—L. Sanders, *The Case of Lucy Bending* (「中に入ってくれない?」「それじゃ、ほんの2, 3分だけね。何か飲み物があるかい?」)

以下のように、相手に対して部分的な賛同 (partial agreement) や部分的な不賛同 (partial disagreement) を示すが、本音では異なる意向を持っていることが *but* と呼応して、補足説明が続くことも多い。(36c) では、積極的に相手の言葉に同意しているが、子供に夫婦喧嘩をしていたことを指摘され、動揺を隠せず、言葉が続かなくなっている。

(36) a. “I’d say we are acting in good faith.” “*Well*, maybe, *but* I don’t know if we can—.”—M. Crichton, *Disclosure* (「僕たちは誠実な態度を取っていると{i>いわせてくれよ。」「ええ、たぶんね、でも私たちにそうできるか分からないわ。」)

b. “Did he leave a forwarding address?” “*Well*, no, *but* I have his ex-wife’s address, under ‘nearest relative not living with you.’”—S. Grafton, “*N*” *Is For Noose* (「彼は転送先の住所を残していったのかい?」「いえ、でも『あなたと同居していない最も近い身寄り』として、前の奥さんの住所はあるわ。」)

c. “Daddy said you used to have fights.” “*Well*, we did, certainly, that’s true, *but* I—” She felt too flustered to go on. (「ママたちも昔はよく喧嘩してたってパパが言っていた

わよ。」「ええ、喧嘩していたわ、確かにね、あなたの言う通り、でもね、私は…」
彼女は気恥かしくて言葉が続かなかった。)

次の表現は、*sort[kind] of* 単独でも現れることが多いが、くだけた言い方で、「まあね、ちょっとね」といった部分的な賛同を表す「ぼかし表現」(hedge) としてしばしば用いられる。

(37) “That’s what you figured.” “Well, sort of.”—L. Block, *The Burglar In the Rye* (「それに気づいたのね。」「まあ、そうだね。」)

そして、さらに、相手の言葉に同調して、賞賛的な感情表出 (admiration) にも *well* が伴う。

(38) a. After a small pause, Megan asks, “Well, what do you hear from Peg?” “Well, she’s absolutely wonderful.”—A. Adams, *Superior Women* (少しポーズを置いて、「ねえ、ペグから便りがある？」とメグは尋ねた。「ええ、彼女はとっても素晴らしい人よ。」)

b. “I brought you some strudel for your birthday,” she said. “Not apple. It’s nut. The best I ever made. You’re gonna wish you had more.” “Well, Rosie, how nice!”—S. Grafton, “G” *Is For Gumshoe* (「誕生日にシュトルーデル〔菓子名〕を持ってきたわ。』と彼女は言った。「中身はリンゴじゃないわ。ナッツよ。最高の出来だわ。きつともつと食べたいと思うわよ。」「まあ、ロージー、本当にご親切に有難う。」)

2.3 文脈の中の *well* (2): 会話の展開を支える *well*

コミュニケーション調整は、すぐにできる場合と少し時間がかかる場合がある。後者の場合に、*well* で会話が中断されることになるが、単独で使用される *well* と共に、*well* の本質的な意味が表に出てくると考えられる。話し手は、一時的に、文脈を切り離して *well* の世界に入っていくのである。

2.3.1 時間かせぎを表す *well*

しばしば自らの談話調整を打ち出すことへの「ためらい」や「躊躇」を表し、「熟慮中である」ことを示唆する。相手の発話や自らの発話において不適切な言葉づかいがある場合、あるいは適切な言葉が見つからない場合に、よく生じる状況である。*well* を介して調整を図ろうとするが、(39) のように *well* と発することで、「熟慮中である」ことを表し、適切な表現が見つかるまでの時間かせぎとなるとともに、まだこの先自分の発話順番を維持し、言葉が続けようとしていることも合図している。

(40a) の *sort of* や (40b) の *I mean* のような表現との共起にも注意されたい。

(39) “Well,” Piston said slowly, searching for the words that would put it more delicately, “most of the people who went to Nadia, Copland for instance, were already full-blown artists.”—

E. Segal, *The Class* (「ええっと」とプロストンはもう少し慎重な言い方の言葉を探しながら、ゆっくりとした口調で言った。「ナディアに行ったほとんどの人は、例えば、オップランドのように、すでに一人前の芸術家だったんだ。」)

- (40) a. “Father, I appreciate your asking. But I’m sort of, really, *well* ... extremely ... disinclined.”—E. Segal, *Oliver’s Story* (「お父さん、お気遣い有難うございます。でも僕は、ちょっと、本当に、そのう、まったく ... 気が向かないんです。」)
- b. For some reason that angered her. “So what am I supposed to do about it—shout hooray and open my legs?” He was taken aback. “I mean...*well*, I thought you wanted commitment.”—K. Follett, *The Hammer of Eden* (なんとなく、その言葉に彼女は腹が立った。「それで私はどうすればいいの？ 歓声を上げて脚を広げろとでも言うの？」彼はたじろいだ。「いや、そのう、君は何か約束を欲しがっていると思ったんだ。」)

2.3.2 焦点化を表す *well*

次の例では、意識的に *well* を差し挟み、次に来る語に焦点を当てているように思われる。このように、もっぱら焦点化の機能を担う *well* もある。

- (41) a. “By this time I think I already knew that the story she told me about my father was, *well*, a story.”—L. Block, *Hit Man* (「この時までには私の父について彼女が語った話が、そのう、ひとつの物語になっていることをすでに気づいていたんだ。」)
- b. “I guess I’ve just been, *well*, extremely depressed,” Lavinia tells Henry, the next morning, over a rather scanty breakfast.—A. Adams, *Super Women* (「ずっと、そのう、とっても落ち込んでいたのよ。」と、かなりわずかな朝食を取りながら、ラビニワは翌朝ヘンリーに言った。)
- c. “Whenever I read one of his Eighty-seventh Precinct books,” she said, “I wind up looking at cop in a new light. I see them as human beings, sensitive and vulnerable and *well*, human.”—L. Block, *The Burglar in the Library* (「彼の 87 分署の話を読むたびに警官の見方が変わるんだ。彼らのことを人間で、敏感で、傷つきやすい、そして、そのう、人間らしいと感じるんだよ。」)

こうした焦点化の機能は、次にみられるような、適切な表現への修正を合図する用法でも顕著である。(42a) では、修正後の *appear* に焦点が当てられて、原文でもイタリックとなり、強勢を受けることが明示されている。

- (42) a. He’d learned never to be alarmed by anything the children asked—*well*, never to *appear* (原文イタ) alarmed—and he smiled down at the boys as he dried his hands with paper towels.—J. Deaver, *The Devil’s Teardrops* (彼は子供たちが尋ねることに

は決して驚かないようになっていた。少なくとも、表面上はそのように装ったのだが、彼はペーパータオルで手を乾かしながら少年たちに微笑みかけた。）

- b. “Meanwhile, this is your schedule. You’ll be on the call for the next twenty-four hours, starting at six o’clock.” He looked at his watch. “That’s thirty minutes from now.” Page looked at him in astonishment. Her day had started at five thirty that morning. “Twenty-four hours?” “Well, thirty-six, actually. Because you’ll be staring rounds again in the morning”—S. Sheldon, *Nothing Lasts Forever* (「当分、これが君のスケジュールだ。6時から24時間待機しておいてくれ。」彼は時計を見た。「30分後だ。」ページは驚きの目で彼を見た。彼女の一日は今朝5時半から始まっていた。「24時間ですって?」「いや、実際は、36時間だ。というのも朝もう一度回診することになるからね。」)
- c. “I drank a glass of brandy on Tuesday and woke up on a Friday. That would be remarkable enough, but this particular Friday happens to be twenty-five years later. Well, twenty-four and a half, anyway. It’s like Rip van Winkle, isn’t it?”—L. Block, *Tanner on Ice* (「私は火曜日にブランディを一杯飲んである金曜日に目が覚めたのよ。すごい話なんだけど、この特別な金曜日はたまたま25年後なのよ。いえ、少なくとも24年半は経っているのよ。まるでリップ・バン・ウィンクルみたいな話でしょ。」)

以下の例では、単に適切な語句が見つからないというよりは、相手が理解できない状況があり、説明全体を変更すること求められ、*well* から初めて、全体を言い換えている。談話方策の切り替えとも呼べる機能である。

(43) A: Can I phone you later?

B: I won’t be in.

A: *Well*, can I e-mail you then?

(Blakemore 2001:131)

(A: 後で電話していい? B: 僕はいないよ。A: それじゃ、eメールを送っていい?)

(44) Puzzled, Ken Franklin said, “I’m afraid I don’t follow you.” “*Well*, like I said, I phoned. I called you last night to tell you I was coming...but there wasn’t any answer.” —L. Hays, *Columbo#5: Murder By The Book* (当惑して、ケン・フランクリンは言った。「君の言っていることが理解できない。」「そのう、言ったように、僕は電話したんだ。今から行くことを伝えるために昨晚電話したんだ。でも誰も出なかった。」)

さらに、自らの語りの中で、修正していく場合がある。

(45) a. It all started...*well*, who knows when it started?—L. Block, *Tanner on ice* (すべてが始まっていた、いや、いつ始まったかは誰にも分からない。)

- b. That was almost a year ago...well, it would be a year this March.—Ed McBain, *The Last Best Hope* (それはほぼ一年前の出来事であった、いや、この3月で1年になる。)

そして、首尾よくその探している言葉が見つかった場合には、より良い方向への談話修正を表し、制限を加え、最小限言えることへの修正となる。しかし、場合によっては、結局、言葉が見つからず、そのまま打ち切ってしまう場合や、相手にその先を委ねて会話が進んでいく場合がある。以下の例では、相手の申し出に対して、応じる言葉が見つからず、*well* だけを発して、相手にさらに会話を進めてもらおうとしている。

- (46) a. “We’ll uncork another bottle and maybe do some fishing...” “Well...” “You know what the matter with you, old buddy. Your trouble is you can’t let yourself unwind...just for one day.”—L. Hays, *Columbo#5: Murder By The Book* (「もう一本ワインを開けて、それから魚釣りでもして...」「そうだな...」「どこが君の問題か分かっているだろ。君の困ったところはくつろげないってことだよ、たった一日でもね。」)
- b. “So this is a deal where you sell the loot back to the insurance company.” “Well, in the case...”—L. Block, *The Burglar In the Rye* (「だからこれは盗品を保険会社に売り戻す取引なんだ。」「いや、その場合...」)
- c. “Try the theater groups down there.” “Any other ideas?” “Well...” “Yes?” “I suppose you could try the lesbian bars.”—Ed McBain, *The Last Best Hope* (「あそこにいる劇団連中に聞いてみよう。」「他に考えはないのかい?」「そうだな...」「何だい?」「レズビアンバーに当たってみるっていうのはどうだい。」)

2.3.3 話題調整を表す *well*

談話調整のプロセスについて考えていく際に、談話構造のもう少し大きな単位を念頭に置くと、新たな認知環境の変化が生じるのは、一つのトピックの切り替えや終結を図ろうとする時である。(47b)では、後続する *anyway* と共に、話題の切り替えを合図するマーカーとして *well* が機能している。(47c)でも、*let’s* 構文が後続しているが、新しい提案を行っている。

- (47) a. Parnell shook his head emphatically. “Not Kloss. It wouldn’t be in him.” “Yeah? Well... let me change the subject. Did you hear of a guy named Harry Lehman?” —S. Martin, *The Judge* (パーネルは強く首を振った。「クロスじゃない。彼のやることじゃない。」「本当かい? そのう、話題を変えよう。ハリリー・リーマンという名前の男のことを耳にしたことがないかい?」)
- b. “I apologize for putting you in the middle. But if I push it too hard I’m liable to get nothing. Believe me, when I get it, it’s going to be pure gold.” “Well, anyway, let’s have lunch. Maybe we can talk it over and find some way to move things along.”—L. Hays,

Columbo#6: A Deadly State of Mind (「君を巻き込んですまない。しかしもし強引にやっても何も得られない性分なんだ。信じてくれ、それが手に入れば、本当に貴重品になる。」「まあ、とにかく昼食を食べよう。よく話をして事を進める何らかの方法を見つけよう。」)

- c. “When I came through I was surprised how complicated the freeway system was.” “I guess it’s not as bad as San Francisco, but I know San Francisco.” “Well, you’re here now. Let’s order and get you calmed down.”—K. Follett, *The Hammer of Eden* (「やって来たとき、高速道路網が複雑で驚いたわ。」「サンフランシスコほどひどくはないわよ、でもサンフランシスコは知っているけれどもね。」「とにかく、今君はここに到着している。さあ食事の注文して落ち着こう。」)

2.4 会話を締めくくる *well*

また、会話全体を打ち切ろうとする際に、最終的な新しい認知環境が生じると言える。会話全体の終結を合図するマーカーとして *well* が機能するのである。

- (48) a. “You’re going to be more specific.” “Ah. I was afraid of that.” I said. “Well, I guess I have to do my homework. Thanks anyway.”—S. Grafton, “*N*” *Is For Noose* (「もう少し具体的に話をしなくてはけないな。」「そうね。でもそうすることが怖かったのよ。』と私は言った。「じゃ、宿題が残っているんで。とにかく有難う。」)
- b. “That’s a long time,” he remarked. “Okay. Well, uh, thanks again.” His face vanished.—H. Clement, *Columbo#3: Any Old Port in A Storm* (「大変だったね。』と彼は言った。「さてと。じゃ、ええっと、もう一度お礼を言わせてもらおうよ。』彼の姿が消えた。)
- c. “Well, Lucy, I think our time is up.”—L. Sanders, *The Case of Lucy Bending* (「さて、ルーシー、おしまいの時間だ。」)
- d. “That’s right.” Priest said. “I like the weather here too much to leave.” “Well, I’d just like to say, very sincerely, that it’s been real privilege and pleasure knowing you, even for such a short time.”—K. Follett, *The Hammer of Eden* (「その通りだ。』牧師は言った。「この天気気が気に入って離れたくないな。」「そのう、本当にここから申し上げたいのですが、ほんの短時間でも、あなたと知り合いになれて本当に光栄です。」)
- e. Peg stubs out her just-lit cigarette, and she mutters, “Well, bye,” and she hurries up the path.—A. Adams, *Superior Women* (ペグはつけたばかりの煙草をもみ消し、「じゃあ、さようなら」とつぶやき、道を急いだ。)

(48a) では、会話を締めくくる発話の前の発話で用いられている。(48b) のように、先行する *Okay* も会話の終結を合図する標識で用いられることが多いが、会話の締めくくりとしての謝辞に *well* が先行している。(48c) では、カウンセリングを行っている精神科医が、その日のカウンセリングを終了する際の切り出しとして *well* を用いている。(48d) でも、非常に

丁寧に響く会話の締めくくりを表す言葉が後続しているが、*well*にも、話し手の控えめな、相手を思いやる気持ちが反映されている。(48e)は、別れの言葉に *well* が先行している。

(50)では、殺人事件の捜査に訪れた警察に対して、*well* 単独で会話を打ち切るばかりでなく、もう帰ってほしいことを要求している。

(50) They put the padlock back on the door and trudged downstairs. The red-headed woman stuck her face out again. “Well?” she demanded. “Good day, madam,” Edward X. Delaney said politely, lifting his homburg.—L. Sanders, *The Second Deadly Sin* (彼らはドアの南京錠をかけて階段を下りて行った。赤毛の除デイが顔を出した。「あのう」と彼女は要求した。「ごきげんよう、奥さん。」エドワード・X・デレニーはホンブルグ帽を上げながら丁寧に言った。)

以上、談話の流れと共に、様々な *well* の用法を見てきたが、*well* の難しさは、その多様性にあった。談話の開始から終結に至るまで、ほとんどすべての文脈に *well* が現れ、その機能も、態度明示・感情表出的領域、談話構造的領域、情報的領域、そして対人関係の領域に渡って、具体的な文脈に応じた働きをしている。以下、*well* の全体像を掴むために、本稿における一般化を図っておきたい。

3. 再び *well* の一般化について

well の発話のきっかけとなるのは、新しい認知環境の変化であった。その認知環境の変化は、眼前の新しい状況や相手の言動により生じる。また、話し手の主体的な働きかけで、新しい認知環境を生み出すこともある。そして、その新しい認知環境を *well* でマークして、話し手は、その新しい認知環境に対して、会話が望ましい方向に進むように調整していくのである。

単に、新しい認知環境に対する反応で終わる場合には、*well* は、間投詞的となり、驚きから賞賛まで、様々な感情表出を伴うことになる。コミュニケーションの調整も、様々な文脈の中で、様々な事柄に焦点を当てて行われる。そのスコープが最も狭いのは、談話修正を合図する場合で、*well* の後でより適切な表現が添えられていく。*well* のスコープが少し広がっていくと、話題の調整となり、話題を変更する際に用いられる。また、その話題を終結することもある。ここでの *well* の働きは、*well* と発することで、自分の発言権を維持し、発話を継続していくことにある。また、場合によっては、*well* を介して、相手に発言権を譲り、相手の助けを借りることもある。*well* がクッションとなり、話し手自らの躊躇や控えめな態度、そして、相手に対する思いやりも同時に表わされていく。そして、最終的に、会話の終結に至ると、*well* と切り出すことによって、謝辞や別れの言葉と共に、会話の締めくくりを図るのである。

これらすべてのことをカバーする共通の意味、あるいは果たす機能として言えることは、以下の通りである。

well のコア的意味機能：*well* は、話し手が認知環境の変化に接し、それに反応して感情表出すると共に、会話の流れを円滑にするために、熟慮し、相手を気遣いながら、その調整を図ろうとしていることを合図する談話標識である。

英語学習者にとっては、上記のような全体像を掴むための一般化と共に、具体的な用法を一つずつ理解していくことが重要である。最後に、本稿で取り上げた *well* の多様性を、*well* の意味ネットワークとして、以下の表にまとめておきたい。

Adjectival	In good health; In a good state or position		
Adverbial	In a good, right or appropriate way; Thoroughly and completely; To a great extent or degree		
Interjectional	Core meaning of the discourse-marker <i>well</i>		
	Facing a new cognitive situation, the speaker responds to it and goes into epistemic consideration to make a flow of discourse smooth.		
	Expressive, Attitudinal	Textual	Informational
	Surprise Indignation Counter-argument Refusal Direct Denial Doubt Partial Disagreement Reluctance to answer Resignation Partial Agreement Jesting, Mocking Admiration	Opening Narrative progression Gaining time Reformulation Correction Change of Topic Pre-closing Closing	Receiving Insufficient Information Requiring Further Information Presenting Relevant Information
	Interpersonal		
Face-saving of hearer Hesitancy Reservation Face-saving of speaker Defensiveness			

Table 1 : Semantic network for *well*

4. おわりに

本稿では、廣瀬 (2014) で論じた、談話標識とは何か、あるいはその談話標識をどのように考えていけばよいのかをという議論を受けて、その実践的な研究として、究極の談話標識とも言える *well* についての分析を行った。

well は、談話の流れの中で、ほとんどすべての文脈で生じ、その生じる環境によって様々な機能を果たすため、一言では捉えにくい談話標識となっている。その一般化を図ろうと

すると、かなり抽象的な一般化にならざるを得ないが、*well* の談話標識的な機能の中心は、(a) 談話の構築、(b) 談話の立て直し、(c) 談話の終結、といった話し手の談話調整機能であった。

新しい認知環境に対する感情的な反応のみを表す場合は、本来的な間投詞としての機能となる。また、談話調整の際に、わざわざ *well* と発する動機としては、話し手自身の態度表明であり、自分自身に向けられる場合と相手に向けられる場合があり、前者では、「ためらい」、「躊躇」、「不十分さ」、「疑い」、「否認、否定」等、文脈によって様々な否定的態度のみならず、肯定的な態度表明も表すことができ、その際には「遠慮」「相手への敬意」を伴った態度表明となり、広く丁寧さ (politeness) と関わった機能も果たしている。この *well* の果たす対人関係における役割を追及していくことが、今後の *well* の研究の方向性の一つである。³

well は、最も捉えにくい談話標識と言われてきたが、逆に、*well* を徹底的に分析すると談話標識全体の働きを明確できる可能性を秘めた語であると言える。

最後に、談話標識の今後の研究の方向性としては、大きく2つの方向性が考えられる。個別の談話標識に焦点を当て、さらに徹底的な記述を目指す方向性と、1つの共通する機能から複数の談話標識を見渡し、それぞれが果たす役割の相違にも注意しながら体系化を図っていく研究の方向性である。両者は相補的な関係にあり、いずれも重要な研究であるが、前者の研究については、本稿を含め、これまでの語法研究等で着実に積み上げられてきており、今後、後者の方向性からのさらなる研究を期待したい。

注

- 1 早い段階における *well* の研究書として、Carlson(1984)がある。Grice流の語用論の観点から小説に現れた *well* を分析している。
- 2 談話分析の立場からの *well* の分析もなされてきた。Svartvik(1980:177)は、*well* の機能を以下のように集約している：*Well signals a modification or partial change in the discourse, i.e. it introduces a part of discourse that has something in common with what went before but also differs from it to some degree.* また、Owen(1981:110)は、いわゆる face 理論 [cf. Brown & Levinson(1987)] を援用して、以下のように *well* の機能をまとめている：*Thus we can describe well, used to preface a second-pair which is also a face-threatening act, as a strategy for signaling that a face-threat is about to occur, thereby giving attention to alter's face and reducing the subsequent threat.*
- 3 Variational Pragmatics (言語変種語用論) の立場から談話標識を考察した Ajimer (2013) が他の研究の方向性を示したものとして、注目される。従来あまり視野に入れられていなかった談話の形 (対話かモノローグか)、私的な場か公的な場か、伝達様式 (対面か電話の会話か) といった要因と談話標識の使われ方の関係を論じている。

参考文献

- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. New York: Macmillan.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- . 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- . 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2009. 'Topic Orientation Markers.' *Journal of Pragmatics* 41, 892-98.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bolinger, D. 1986. *Intonation and Its Uses: Melody in Grammar and Discourse*. Stanford: Stanford University Press.
- Briton, L.J. 1996. *Pragmatic markers in English Grammaticalization and discourse functions*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Universals in language usage: politeness phenomena*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carlson, L. 1984. 'Well' in *Dialogue Games: A Discourse Analysis of the Interjection 'Well' in Idealized Conversation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Cuenca, M-J. 2008. 'Pragmatic markers in contrast: The case of well.' *Journal of Pragmatics* 40, 1373-91.
- Finell, A. "'Well' now and then." *Journal of Pragmatics* 13, 653-656.
- Fraser, B. 1990. "An approach to discourse markers." *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- . 1996. "Pragmatic markers." *Pragmatics* 6(2), 167-190.
- . 1999. "What are discourse markers?" *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- . 2009. "Topic Orientation Markers." *Journal of Pragmatics* 41, 892-98.
- Greasley, P. "An investigation into the use of particle *well*: Commentaries on a game of snooker." *Journal of pragmatics* 22, 477-494.
- 廣瀬浩三 . 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学会（編）『現代の言語研究』263-74. 東京：金星堂.
- . 1989a. 「談話辞 anyway の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京：山口書店 .
- . 1989b. "A Discourse Grammar of *anyway*." 『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.
- . 1997. 「Love means never having to say "What do you mean?"—メタ言語活動の諸相(1)」『島大言語文化』4, 14-61.
- . 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』東京：大修館書店. 287-95.
- . 1999. 「Love means never having to say "What do you mean?"—英語におけるメタ言語的活動の諸相(2)」『島大言語文化』7, 1-51.
- . 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50.

- 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol. CXLVII, No.7, 446-47. 東京：研究社.
- 2003. 「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』14, 21-41.
- 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-37.
- 2014. 「談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第9号, 1-33.
- Ifantidou-Trouki, E. 1992. "Sentential adverbs and relevance." *Lingua* 90, 69-90.
- Jucker, A. 1993. "The discourse marker *well*: A relevance-theoretical account." *Journal of Pragmatics* 19, 435-452.
- Jucker, A.H. and S.W. Smith. 1998. "And people just you know like 'wow'; discourse markers as negotiating strategies." In A. Jucker & Y. Ziv (eds.), In *Discourse Markers: Description and Theory*. P & B.ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 171-222.
- Jucker, A. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.
- Lakoff, R. 1973. "Questionable answers and answerable questions." In Kachru, B. B. et al (eds.) *Issues in Linguistic Papers in Honor of Henry and Renne Kahane*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Langacker, R.W. 1986. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.I. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 1992. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.II. Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- Muller, S. 2004. "Well you know the type of person: functions of 'well' in the speech of American and German Students." *Journal of Pragmatics* 36, 1157-1182.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Redeker, G. "Review of Schiffrin, 1987." *Linguistics* 29, 1139-1172.
- Rosch, E. 1978. "Principles in Categorization." In N. Warren (ed.) *Studies in Cross-Cultural Psychology*, Vol. 1, 1-49. London: Academic Press.
- Schiffrin, D. 1985. "Conversational coherence: the role of 'well.'" *Language* 61, 640-667.
- 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D., D. Tannen and H.E. Hamilton (eds.). 2001/2004. *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell.
- Schourup, L.C. 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation*. New York & London: Garland.
- 1999b. "Discourse markers." *Lingua* 107, 227-265.
- 2000. "Homing in on Discourse Marker Meaning." 『英語語法文法研究』7, 5-17.
- 2001. 'Rethinking *well*.' *Journal of Pragmatics* 33(7), 1025-1060.
- Schourup, L.C. and T. Waida. 1988. *English connectives*. 東京：くろしお出版.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995². *Relevance: communication and recognition*. Oxford:

Blackwell.

Svartvik, J. 1980. "Well in conversation." In S. Greenbaum et al. (eds.) , *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London: Longman. 167-77.

Swan, M. 2005³. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.

Watts, R.J. 1989. "Taking the pitcher to the 'well': Native speakers' perception of their Use of discourse markers in conversation." *Journal of Pragmatics* 13, 203-237.